

早稲田大学 総合人文科学研究センター

「行動・社会文化に関する多角的アプローチ」部門主催 2018 年度 勉強会 報告書

日時：2018 年 11 月 5 日（月）15:00－17:00

場所：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33 号館 3 階 第 2 会議室

発表

1. Eriko Matsuki (Department of Psychology, The University of Western Ontario, Canada)

「Conceptual Representation in Bilinguals: A Feature-Based Approach」

2. 薛俊毅（早稲田大学大学院文研究科）

「漢字熟語における音韻変化と音韻表象の本質～ 促音化と連濁を対象とする研究～」

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「行動・社会文化に関する多角的アプローチ」主催による第 2 回勉強会が 2018 年 11 月 5 日に開催された。

まずカナダ・西オントリオ大学博士課程の松木えりこ氏から研究発表として、博士論文について英語での報告がおこなわれた。日本語と英語のバイリンガル話者を、日本語ないし英語それぞれのモノリンガル話者と比較して調査をおこない、用いる言語によって想起される feature(s)の傾向が変化することについて、日本語の「やかん」と英語の「kettle」などの事例を通じて紹介され、理論的考察がなされた。質疑応答は英語および日本語を交えておこなわれ、バイリンガル話者とモノリンガル話者とを比較するうえで、「英語圏での生活年数」などはどれだけ有効な指標として捉えることができるかといった問題について議論が交わされたほか、英語と中国語、日本語と中国語などさまざまな言語間で、同じ意味をさす単語に対して異なった feature を連想する事例なども報告された。

次に、早稲田大学博士課程の薛俊毅氏の研究発表として、日本語話者は漢字 2 文字以上の熟語を判読する際に、そこで起こる連濁（雪国「ゆき・くに」→「ゆきぐに」）や促音（発見「はつ・けん」→「はっけん」）といった発音規則の変化について、漢字熟語という形態と発音という音韻表象の結びつきがどのようなものであるか、「一段階仮説」（「発見」という表記の形態をそのまま「はっけん」という音韻表象に結びつけている）と「二段階仮説」（「発見」を「はつ・けん」と読んでから「はっけん」に修正する）の両面から実験によって検証した結果について報告がなされた。実験結果から「二段階仮説」がより有力とする報告に対し、実験データなどをもとに「一段階仮説」に対して「二段階仮説」を採る場合に不十分と思われる点について質疑応答の際に議論がなされたほか、促音以外の連濁や連声（反応「はん・おう」→「はんのう」）といった他の発音規則に関しても同じことが当てはまるのかという話題にも議論が広まった。

教員、助手、大学院生などに加え、学部生の参加もあり、複数言語にまたがった心理学的な問題についてさまざまな言語の話者たちが事例を出し合うなど、発表内容に関連して活発な討議がおこなわれ、密度の高い勉強会となった。

(記録・吉田隼人)